

## 人生の谷間も 神様の愛と導きを信じて生きる

創世記41章37～49節

2022年8月21日

松田 基子 師

私達は天地万物を造り、人間に命と使命を与えて、世に送り出しておられる創造主なる神様を信じています。そして、この神様が、時間も歴史も導いておられることを信じています。しかし見えるところ、現実には戦争があり、温暖化による気候変動は洪水や干ばつなどの災害をもたらし、食糧危機が懸念されています。神様は本当に居られるのだろうか。神様は人間の事を、本当に心配して下さっているのだろうか。世界には80億近くもの人間がいるのに、その中の点にも表せない、目に留まり得ないとしか考えられないこの私を、本当に心配して下さっているのだろうか。そんな疑いが起こって来るのではないのでしょうか。しかし、私達は、その全てにNOを言い、どんな困難な状況に置かれても、その所に神様の愛の眼差しを信じ、神様の御手が動く時まで、持ち堪えなければなりません。 **信じ続ける者のみ**が、神様の御業を体験する事が出来るのです。

聖書はその事を創世記のヨセフの生涯を通してわたしたちに教えています。ヨセフは族長ヤコブの11番目の男児として生まれましたが、父ヤコブは、ヨセフが亡き最愛の妻ラケルの忘れ形見であり、年寄り子であったことから、ヨセフを偏愛し、そのあやまちはヨセフを、他の兄弟の憎しみの的としてしまいました。10人の兄達が父の羊を養うために、百キロ以上もの遊牧に出かけたとき、ヤコブは兄達と、羊の様子を知るために、ヨセフを彼らの所に遣いに出しました。兄達は日頃の憎しみから、父の目が届かない事を良い事に、ヨセフを捕らえ、エジプトへの隊商に、彼を売ってしまいました。ヨセフはその時17歳でした。エジプトにつれて行かれたヨセフは、ファラオの宮廷の役人で、侍従長のポティファルに買われました。ヨセフは兄達の自分への憎しみなど、思っても見なただけに、自分が奴隷として売られたことに深く傷付きました。しか

し、そこで兄達への憎しみに燃えることなく、神様を見上げることによって彼は命の道を歩みました。

創世記39章3節には、

「主が彼のすることをすべてうまく計らわれるのを見た主人は、ヨセフに目をかけて身近に仕えさせ、家の管理をゆだね、財産をすべて彼の手に任せた」

とあります。ヨセフにとってエジプトは全く新しい世界でした。ヨセフが育った、のどかな牧羊の世界ではなく、大都会で、武術や商業、文化の世界でした。奴隷とは言え、宮廷の役人の家に導かれたのも、神様の導きでした。吸収力旺盛なヨセフは、兄達に、奴隷に売られた事を恨んでいる暇はありませんでした。

ヨセフは父ヤコブが信じ、礼拝する神様を、信じていました。父に愛され、特別視された事は、他の兄弟には辛い思いをさせましたが、ヨセフは父の許で、主なる神様がヤコブと共にいて下さり、ラバンの悪巧みや、全ての危機を乗り越えさせて、祝福して下さった事を、何度も聞いて育ったことでしょう。ヨセフはその、主なる神様が、自分とも共にいて下さり、祝福して下さる事を確信出来ました。ヨセフはただ主なる神様に信頼し、周りの人から色々な事を吸収して、能力を磨きました。主人ポティファルの目に留まるまで、何年かかったのでしょうか。20歳も過ぎてからのことでしょう。ヨセフは主なる神様を信じ、精一杯仕事に励んだことにより、周りにはヨセフには、彼の神様が共に居られ、助けておられると見えたのでした。

主人はその事が分かったと、自分の全財産をヨセフの手に委ねました。ヨセフは愈々管理能力を発揮し、主は愈々、主人の家を祝福されました。何もかも上手くいく絶好調の時、人は試されるものです。39章6節には、

「ヨセフは顔も美しく、体つきも優れていた」と記されています。その事が主人の妻から誘惑を受けることになってしまいました。ヨセフは主人の妻の、しつこい誘惑に毅然として、39章9節で、

「どうしてそのように大きな悪を働いて、

神に罪を犯すことが出来ましょう」

と答えています。主人の妻は、ヨセフを奴隷としてしか見ておらず、自分の意に添わなかったため、

「ヨセフが誘惑した」

と主人に嘘をついて、ヨセフを投獄させました。

奴隷に言明の機会はありません。侍従長の家には、王の囚人を繋ぐ監獄があり、ヨセフはそこに入れられてしまいました。だからといってヨセフは絶望しませんでした。主なる神様はいつも共におられ、全てを見ておられる。主なる神様が最善の時に証明して下さると、ヨセフは、人を頼みとせず、神様を頼みとしました。結果はどうだったのでしょうか。39章21節に、

「主がヨセフと共におられ、恵を施し、監守長の目にかなうように導かれたので、監守長は監獄にいる囚人を皆、ヨセフの手に委ね、獄中の人のすることはすべてヨセフが取り仕切るようになった」

とあります。

そんなある日、エジプト王の給仕役と、料理役が、ファラオに、あやまちを犯し、ヨセフのいる牢に投獄されました。そして、ヨセフが二人の身の世話をすることになりました。ところが、彼ら二人は同じ夜に夢をみました。憂鬱な顔をしている二人に、ヨセフが尋ねると、

「我々は夢を見たのだが、それを説き明かしてくれる人がいない」

と二人は答えました。ヨセフは、

「説き明かしは神がなさることではありませんか。どうかわたしに話してみてください」

と言いました。

夢みるヨセフは、いつも神様に聴き従って来たことによって、また夢を解く力も与えられていました。人の目には、

『物事は、人間の力で動いている』

かにみえましたが、神様はヨセフの人生を導くために、道をつけておられました。ここでの夢解きが、ヨセフの将来に何をもちたらかは、神様だけがご存知でした。自分の見た夢について、先ず、給仕役の長が語りました。

『三本のつるに豊かに実ったぶどうを、ファラ

オの盃に絞って献げた』

と言うものでした。ヨセフはその夢は、『3日後に、ファラオは、彼を元の職に復帰させる』

と告げました。そして、

『それが実現した時は、無実の罪で投獄されている自分を、ファラオに告げて、自分をここから助け出して欲しい』

と頼みました。続いて、料理役の長が、自分の夢を語りました。

『頭の上の三個の籠の一番上に入れた、ファラオのために作った料理を、鳥が食べている』

というものでした。ヨセフは、

『3日後、ファラオがあなたの頭を上げて切り離し、あなたを木に架けます。そして、鳥があなたの肉をついばみます』

と彼の夢を説き明かしました。

はたして、三日後、二人は夢の通りに、給仕役は元の地位に復帰し、料理役は木に架けられてしまいました。ヨセフの夢解きは、実現しました。ところが給仕役の長は、余りの嬉しさに、肝心のヨセフのことを、忘れてしまいました。ヨセフは今日牢獄から解放されるか、明日解放されるかと心待ちにしていたでしょう。しかし、実は神様の時は、まだ来ていなかったのです。ところで私達は、自分の祈りを神様に必死に祈ります。

『自分は何も自分勝手な祈りはしていないのに、神様はどうして聴いて下さらないのだろうか』

と言う思いを抱くことはないでしょうか。

私達は祈りにおいても、自己中心です。神様を祈りで動かそうとします。しかし、それはまちがいです。確かに神様は、私達の祈り、心の思い願いを聴いてくださいます。しかし、その、

『聴いて下さる』

と言うのは、それを、叶えて下さるという意味ではありません

『耳を傾け、理解してくださる』

という意味です。

私達が忘れてならないことは、

『天地万物全ての主権者は、創造主なる

神様であって、神様こそ、人類を愛し、  
最善の御計画をお持ちで、その御計画  
にしたがって、歴史を動かしておられる』  
ということです。ただし、それは決して機械的に  
プログラム化されている、運命的なものでは  
なく、ご計画を潰そうとする人間の罪、不完全さを  
潜り抜けて、

『神様の最善に導かれていく』

ということです。ですからそこには長い時間が  
掛かります。私達は、物事を見ていく時に、神様  
の愛を、

「神はその独り子を賜ったほどに、

この世を愛して下さった」

という、その一点からみて行かなければなりません。  
この信仰があるかどうかで、神様への信頼  
が生まれ、**神様のときを待つことが出来るように  
なるのです。**

ヨセフは給仕役の長から、何の音沙汰も無い  
からと言って、呟いたり、恨んだりしなかったで  
しょう。これまで通り獄屋にあって、皆の良き助  
け手となったでしょう。何時獄屋から出られるの  
か分からなくても、ヨセフは必ず出られるように  
神様がして下さると信じて、一日一日を誠実に  
努めました。神様のときは必ずやって来ます。

41章1節に、

「2年の後、ファラオは夢を見た。 ナイル川  
のほとりに立っていると、突然、よく肥えた  
7頭の雌牛が川から上がって来て、葦辺で草  
を食べ始めた。すると、その後から、今度は  
醜い、やせ細った7頭の雌牛が川から上がつ  
て来て、岸辺にいる雌牛のそばに立った。  
そして、醜い、やせ細った雌牛が、つややか  
な、よく肥えた7頭の雌牛を食い尽くした。  
ファラオは、そこで目が覚めた。」

「ファラオがまた眠ると、再び夢を見た。

今度は、太って、よく実った7つの穂が、  
一本の茎から出て来た。すると、その後から、  
実が入っていない、東風で干からびた7つの  
穂が生えてきて、実の入っていない穂が、  
太って、実の入った七つの穂をのみ込んでし  
まった。ファラオは、そこで目が覚めた」

とあります。

ファラオはこの夢に、心が騒ぎ、当時夢解きの

専門家であった魔術師や、また、賢者を国中か  
ら呼び集めて、夢の解き明かしを命じましたが、  
王の夢を解ける人は一人もいませんでした。  
その時です、例の給仕役の長が、ヨセフの事を  
思い出すと共に、自分は大きな恩を受けながら、  
裏切っていた罪に気付きました。給仕役の長  
は早速王に、ヨセフの存在を伝えました。王は  
直ぐにヨセフを呼びにやらせました。

41章14節には、

「ヨセフは直ちに牢屋から連れ出され、」

とありますが、岩波訳では、

「彼を穴蔵から出した」

とあります。この穴蔵は、37章20節以下に、出  
て来る、ヨセフが兄達に晴れ着を剥ぎ取られ、  
投げ込まれた水溜の穴と言う同じ言葉が使われ  
ています。ヨセフは17歳の時、兄達にあの空  
になった水溜の穴に投げ込まれてから13年間、  
長い穴蔵の生活に耐えて、今、神様は彼をその  
穴蔵から引き上げ、光の中の生活に導き出され  
たのです。ヨセフは、

『散髪をし、着物を着替えてから、  
ファラオの前に立ちました。』

41章15節に、

「ファラオはヨセフに言った。

『わたしは夢を見たのだが、それを解き  
明かす者がいない。聞くとところによれば、  
お前は夢の話しを聞いて、解き明かすこと  
ができるそうだが。』

ヨセフはファラオに答えた。

『わたしではありません。神がファラオの  
幸いについて告げられるのです』

とあります。ヨセフはファラオに、はっきりと、  
夢を解かれるのは神様であることを伝えていま  
す。

ファラオは自分の見た夢をヨセフに話しました。  
ナイル川はエジプトにとって、豊かさをもたらす  
源でした。その豊かな水量に潤されて、緑地  
が広がり、そこで牧畜が営まれ、また、小麦を始め  
豊かな農産物を産する事が出来、エジプトの  
国中、ナイル川の恵に浴して、豊かな生活が成  
り立っていました。ヨセフは神様に教えられた  
ファラオの夢を解き明かしました。

41章29節に、

「今から7年間、エジプトの国全体に大豊作が訪れます。しかし、その後7年間、飢饉が続く、エジプトの国に、豊作があったことなど、すっかり忘れられてしまうでしょう。飢饉が国を滅ぼしてしまうのです」

と告げました。

やがて来る、日照りによる干ばつは、エジプトの命の源である、ナイル川の水を奪い、作物を育てるための十分な水が得られなくなると言うのです。そこでヨセフの提言が、33節から記されています。

「このような次第ですから、ファラオは今すぐ、聡明で知恵のある人物をお見つけになって、エジプトの国を治めさせ、また、国中に監督官をお立てになり、豊作の7年の間、エジプトの国の産物の五分の一を徴収なさいますように。このようにして、これから訪れる豊年の間に食糧をできるかぎり集めさせ、町々の食糧となる穀物をファラオの管理の下に蓄え、保管させるのです。そうすれば、その食糧がエジプトの国を襲う7年の飢饉に対する国の備蓄となり、飢饉によって国が減びることはないでしょう」

と勧めました。

この言葉を聞いたファラオは家来達に、

『「このように神の霊が宿っている人はほかにあるだろうか」』

と言って、

『神がそういうことをみな示されたからには、お前ほど聡明で知恵のある者は、ほかにはいないであろう。お前をわが宮廷の責任者とする』

と言って、任命しました。

ファラオは物事を決済する、王の指輪をヨセフの指にはめ、最高位に相応しい豪華な衣服を着せ、王の第二の車に乗せました。人々はヨセフの前で、

「敬礼」

と叫びました。また、ヨセフにエジプト名ツァフェナト・パネア、〔彼は生きると神は語った〕と言う意味の名を与え、オンの祭司ポティ・フェラ

の娘アセナトを、妻として与えました。

この時ヨセフは30歳でした。ここに13年間の苦悩と忍耐の時を経て培われた信仰と努力に、神様は花を咲かせ、実を結ばせて下さいました。ヨセフはそれまで培ってきた経験に、神の知恵を受けて、海辺の砂ほども多くの穀物を備え、飢饉に備え、エジプト人ばかりではなく、何よりも父の一族、

『神の祝福を担うために選ばれた一族』を救う事になるのです。

人は誰も、神様の御手の中に、神様のご計画に従って生かされていることを信じ、眩かす、疑わず、ただ、神様に信頼して生きるならば、人生に何一つ無駄になることはありません。私達は神様に導かれて生きることこそ、人生の目的であり使命です。暗い谷間を通る時も、見える所に惑わされず、天を見上げ、神様の時を待つのです。神様は必ず、神様の時に、垂直に働いて下さいます。私達は人生の谷間でこそ、神様の愛を信じ、眩かす、疑わず、黙々と主に従って参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

あなた様は全能の御力をもって世界にどれ程多くの人間が居ようとも、その一人ひとりに、愛の御計画をもって、導き守っていて下さることを感謝いたします。

人生の谷間も、神様は全てを益に変えて下さいます。暗い谷間が長くても、神様は必ずご自身の時に、垂直に助け出して下さる事を信じ、眩かす、疑わず、ご自身に信頼して歩む者とならせて下さい。どうか私達をご自身の御計画のままにお導き下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。